Aterui and Tamuramaro

阿弓流為 と 田村麻呂

VOL. 4

Copyright © 2002 年 吉田征夫

Table of Contents

序 1

桓武天皇御時 3

征夷軍の敗戦 7

坂上田村麻呂 11

御事二つ 15

藤原緒嗣 19

アテルイ 23

後述記 27

Appendix A　筆者記 29

序

岩手山に端を発し三陸側の峰々の流れを集め列島の中央を南下し牡鹿半島の上で太平洋へと流れる川がある．この北上川といえば, 確か宮沢賢治の心を作った川でしょう, 私はよくわ知りませんですが, 多分, 彼はこの流域に誕生しているのでしょう?

深夜に北上川流域に佇んで上空を見上げると，満天の星がキラキラと輝いており，天の川の流れと大地をくねる北上川の流れが平行していることに気がつきます．この列島が日本以前であった古代の当時は, もっと美しかった情景のことと偲ばれます.

昔々のことでございます．倭の国が日本と称号を成して．日本国建設へと天皇権がゆるぎなきつつある時代の，これはお話でございます.

桓武天皇御時

時は桓武天皇が御世のことでございます, 奈良の都では天皇権が朝日がごとき太陽の光を浴びせ, 天皇権を継ぐ者は, この大地の続く限りその果てまでを己が物にする宿命が, 何時のまにか代々の天皇の血に流れるようになっていました.

桓武天皇も王権の覇者に就くと, この宿命を実行に移しなされてございます, 全軍へ「この大地が続く限り己の物とせよ」と, 歴代の天皇と同じ発令をしましたのでございます. 既に代々の天皇によって, 九州も四国も治めておられましてございましたが, 関東から北へ続く蝦夷の大地は未だでございました. 広大な原生林の中で自由に生活をする, 蝦夷の部族を支配する事を, 自分の御世のうちに天皇家の日本国のものへと国家の重要目標に告げたのです.

そのため, 桓武天皇は従来の都である奈良京で, 延々と続きましてございます統治のマンネリ化を一新する為に, まったく新しき政務をの地を京都の盆地に定め, 京都の盆地に新しき都つくりを臣下に命じましてございます.

天皇統治下の世の人々は, 新しい都の建設で仕事が増大し, 民の人達の活気と暮らし向きは一気に良くなりまして. 人々は希望と明日へ向けて生きる活気有る世の中だったと申し聞き及んでございます.

一年・二年. . . . . と年が経ち, 京の都はその壮大な町並みと, 天皇が住まわれる御所の建物が姿が現れてございます. こうなると寺院も商家も, 奈良の都からの新しい京の都へ京の町へと移りざろう得なくなりもうしましたのでございます, 京の都は見る見るうちに人々の間に流行を生み出し, 奈良の都の古典とは一線を引いた, 新しい服装や染め色や様々な今様なデザインを生み出して, それはもう賑わいのかぎりでございます.

天皇家に幸あれ. 桓武天皇の御世に幸あれ. 近隣在所から京都で見てきた土産話は, 在所の老若男女の人々までも虜にしたのでございます. 京の都に行ってみよう, 死ぬ前に一度でよいから噂の京の都を見て死ねたら. . . . . と民の人々の願望でした.

さて, このような賞賛の中で独り桓武天皇は浮かない心でいました. それは, もう一つの方の軍への発令である. 「蝦

夷の地を我が物とせよ」が一向に捗らないばかりか，京の町作りの建設資金までも流用するような状況に迫っていたからでした．

どの御大将も勇んで出征していくのですが，最後は，命からがら無残に逃げ帰ってくるばかりでしたから，桓武天皇は思い悩んでおりました．天皇家の一大目標である，この大地の続く限り我が物とする，に私は失敗するかもと，京の都の建設成功の賞賛とは裏腹に，桓武天皇の御心の内は日々を追って沈むばかりでございました．

そんな中で，おりしも，征夷軍の征東大使である紀古佐美卿が自軍の軍将や軍兵ともども，ぼろぼろになって，当時の陸奥の国から逃げ戻ってきたのでございます．

「おーい，また，征夷軍が逃げ帰ってきたぞ」

「うーん，今度の征夷軍は五万と言うほどの軍勢だったと聞くがな」

「そいつよ．逃げ帰ってきたのは．わずか百人もいなかったそうだ」

「蝦夷はそんなに強いのか」

「向こうには，何しろ．悪路王がいるからな」

「悪路王ってだれだい？」

「蝦夷の大酋長で大墓 公アテルイだよ」

京の都も天皇統治下の市井の民も，高貴な御公達もこの話で持ちきりになりました事のそうです．なにしろ，御大将の紀古佐美卿は半狂乱に近い状態であり，逃げ戻れたわずかの軍将も軍兵も，ただ唇を震わすだけで，何も語れぬほどと．私は聞き及んでござりまする．ただ，この敗戦に公達の御一人が興味を持たれた御仁が居られ申したとか．

．．．．．．はや，月も落ち．月影も闇に消えますなれば，私の語りはまたといたしまして，今宵の事はこれにて閉じるいた

しとうございます.

昔々のことでございます. 倭の国が日本と称号を成して. 天皇権がゆるぎなきつつある時代の事の話でございます.

征夷軍の敗戦

紀古佐美を大将とした征夷軍の敗戦が，殊のほか桓武天皇におかれましては大きな痛手となりもしたと聞き及んでございます．紀古佐美の昇殿は許されない事は申すに及ばずでございますが．なにしろ前代未聞の五万余の大軍を整えての陸奥への侵略であり，兵の要には天皇自らの近衛軍を布陣した征夷軍でございましたので．それが，命からがらわずか百余人しか逃げ延びられない敗走に．桓武天皇におかれましては殊のほかの御心痛であられますことはいかばかりの事であったのでしょうや．

「まったくもって，紀古佐美も貧乏くじを引いた物だよ」

「それよ，征東大使に任ぜられたばかりに，一命をかけて戦って帰ってきたのに，いまだに天皇へどころか，昇殿も許されないのだからな．とんだ貧乏くじよ」

「いやいや，まてよ．もしも，蝦夷を政略できたら，とんだ出世ものになる．太政大臣は約束されたもおなじであろう」

市井の人々も公達たちも一日中この噂話でもちきりであったと，当時のことをそう申しておりました．さて桓武天皇はと申しますと，何時までも失意に有るわけにも行かず．国の政務へとつかの間の安らぎを求めていたと存知聞き及んでおります．

先にも書き申した如く，巷の噂が行きかう中で，一人の公達がこの戦いに興味を抱いた御仁がおられもうしました．その名を田村麻呂と申す御仁で有り申します．田村麻呂と申せば，その色白さ，ひげの立派さ，さらには身の丈五尺八寸，体重三十二貫，胸の厚みが一尺三寸もある異相な偉丈夫なことで，京の都はもちろん奈良の旧都にも知らぬ御仁はおりもうせなんだ．その血筋は帰化人東漢氏の出身で公達の中でも一際英才コースを歩いていた御仁でもありもうしまする．

そう言うことなので，田村麻呂が逃げ帰った武将に一部始終を聞きまわっていることは，京の都ではおのずと知れ渡りもうすことは，至極当然な事でありました．

紀古佐美を大将とし，その副将に多治比浜成，佐伯葛城，入間広成の五万を超える大遠征軍が陸奥の最前線である多賀

城に終結を終了したのが, 陸奥の地に雪解けが始まった三月九日でございました. すぐさま全軍へ出撃の激が告げられ, 蝦夷の胆沢を目指して北進を開始したとのことです. 圧倒的な軍勢のせいか前進基地である伊治城や覚瞥城を確固たる砦とし, ここから先である, つまり, 北上川東岸から先の大和朝廷人も大和の人々も未踏の大地である蝦夷の天地を展望したと話されました.

だが, 全兵とも北上川をはさんだ対岸より続く誰も足を踏み入れたことのない大地を前に, 脚がすくんでいたとの事でございます. 大将の紀古佐美をもってしても, 天皇の檄文「坂東の安危, この一挙にあり」の前進の催促がなかったら, 引き返したい心境になるほど, 対岸の大地は無気味な雰囲気を醸し出していたとのことでございます. 紀古佐美は相当迷いましたらしいですが, 自分のこの上げた手を, 蝦夷の地に向けて下ろしたとたん, 全軍が壊滅するかもしれない恐怖心に震える紀古佐美を見たこともなかったと, 多治比浜成卿は田村麻呂に静かに話したそうであります.

「紀古佐美の君は, なぜそのように怖れていたのでござりまする」

多治比浜成卿の語りますところによりますと, かの蝦夷の地にいかなければ察する事もないはずとのことでありますが, もとより, 蝦夷人は誰一人として戦を好んでいない事, かつ, 他人を支配しようとなどとの考えも持ってなく, その日その日を慎ましく暮らし, それで満足している民人であり,

そうでありますから, もとより, 領土を広げようなどの考えも無き部族なのです. 国家建設などと言う考えもない民人達であるそうです. 紀古佐美の君は学才の優れた御方なので, その事が心に呼び覚ますのでしょうか, 蝦夷地を聖なる土地とも平和なる生活者の村とも思われていたようでございます.

ここまで語ると「地獄だ地獄だ! 」こう言いながら, 多治比浜成卿は田村麻呂卿の御前で発狂していきましたそうでございます. 田村麻呂が解せなかったのは, 戻ってきた者がなぜ発狂していくのか, その原因がかいもく察しがつかないおりました. 生き残った兵は敗戦と言うよりも良心の呵責に耐え切れなくなって狂っていく. がもしそうであるなら, 俺は悪路王に勝てるであろうか, 田村麻呂は必要に一兵に

至るまで, 戦で戻ってきた者を探しては話を聞いたそうでございます.

一兵士の語り.

「紀古佐美征東大使の右腕が振り落とされ, 約五千の徒兵が川を渡り始めました. 一列千人五列で一斉に渡る作戦でした, 川幅は約十間程で, 水かさは少なく一番深いところで胸元程度です. 五列隊が川の中ほど胸元辺りを超えようとした時, 対岸の森から天を蔽うほどの火矢や矢じりが次から次と飛んできたのでございます.

いえいえ, 矢の飛びが切れることは有りませんでした. 青空が戻った時には, 一兵とも川にはおりませんでした」

近衛兵の語り.

「あれほどの矢が一斉に放たれたのですから, 通常はもう矢の在庫は切れかかっていると判断するのが妥当だと思いました. なにしろ, こちら側にはまだ二万五千以上の兵がおりましたので. 私はもう一度同じ作戦で渡りきれると思いましたが, 征東大使の紀古佐美の卿はその日は全軍を待機させて渡る指示はだしませんでした. 本格的な対峙の初戦を敗戦で一夜を明かすことには, 近衛隊として忍びない事は伝えてありました.

農夫兵達の語り. 「翌日, 私達が気がついたときには, 一列五人の縦隊が川を渡っていました. 近衛兵の隊列でした, 昨日と同じように矢の応戦は凄まじい物でした. が, やはり正規軍の違いでしょうか, 対岸に次から次と渡りつく者が多くなりました. 約二千の近衛兵の出撃と聞きました. いえ, そのまま対岸の援護を行い出しました. いえいえ, 私達には渡れの指示はこなかったです. 紀古佐美の卿は, 続いて千五百の近衛兵に渡川を命じ, 渡りきったら, そのまま進軍せよと指示していました.

. . . . . はや, 月も落ち. 月影も闇に消えますなれば, 私の語りはまたといたしまして, 今宵の事はこれにて閉じるいたしとうございます.

昔々のことでございます．倭の国が日本と称号を成して．天皇権がゆるぎなきつつある時代の事の話でございます．

坂上田村麻呂

さて, 今漢人の確事足る信念を受け継いでいる田村麻呂の胸に彷彿していたのは, あの倭国と百済連合軍が白江村浦で新羅と隋の連合軍に壊滅的な敗戦をしたことでした.

この敗戦で天皇権の「日本国」は海までと足かせが, 王権連合に根付き, 百済は完全に歴史から消えていったのでございます. 天皇権の確立と絶対性こそ今漢人の, 王権連合の中で最大の彼岸でしたので, 海を境と狭められたのはかえすがえすも無念の境地でした, 奈良の今漢人の町中は火が消えた心地になりましたのでございます.

この敗戦を受け入れたままにしていると, とんでもない結果を天皇権に及ぼす. アテルイに俺は勝てるか, 天皇国家をこの列島にゆるぎない物にしなければならないが, その力が天皇家にあるのか. 今漢人が目指した, この列島に天皇国家「日本国」建設へ, 悠然と断ち塞いだ蝦夷の大酋長で大墓公アテルイに, 彼ら今漢人達は生きる希望を消される思いでございましたことでしょう.

生き残った兵を探しては聴き取りをしている, 田村麻呂卿にしても何がなんだか掴めないでいるほどでございました. ただ, 田村麻呂卿の胸に彷彿しましたのは, 十万以上の大軍を持ってしないと, アテルイの蝦夷地へは侵入はできなという漠然たる思いでございまする. それに, アテルイとは一体どんな人物なのであろうか, 会って戦ってみたい. . . . . 俺はアテルイに勝てるのであろうか? そのようでございます.

田村麻呂は燃えるように, 今漢人の町中の技術者へ, もっと「山間地の開墾に耐え得る鍬を開発しろ」, もっと寒さにも耐え得る稲の実を作れ. それが蝦夷に勝つ事だ. 日本を作る事だ. と若者を叱咤したそうでございます.

桓武天皇は征夷軍の敗戦は天皇家の威信に関わるどころか, 日本国建設の挫折さえも意味しかけないと思しめしなされたは当然のことでございまする. まず, 大陸から最新の軍事知識に優れてた, 今漢人の田村麻呂を遠征軍副将に命じて準備を始めました. 田村麻呂は即急に, 兵士の訓練を近江の山奥を蝦夷地と見立てて動員し, 武具の製造を今漢人の郷に行わせ, 道筋に兵量の調達と在庫をさせ. 三年の歳月をか

けて再起を計ったのでございます.

三年と言う月日は, また, さまざまなものを変化させてございました. 桓武天皇派が構築した平安京は, もはや, 政府の構想を越えた都市と人家が増加してございます. この流れはそれまでの官営市を衰退させはじめ, 天皇はとうとう国家による銭貨発行である十二銭の鋳造を終了せざるくなりましたのでございます. 大蔵所はこのため経費調達をいかにするか等々と悩みが山積みにありましたとのことでございます.

このことから, 民衆の目を外の向けさせる事や, 日本を六十六カ国と二嶋 (壱岐・対馬) 体制に位置付けと, それを土台とした地理的な相関を日本地図とする固定体制を堅持しましたのでございます. これには蝦夷地も当然の如く組み入れておりましたので, もはや, 蝦夷の大地を我が物とせずには制度も堅持できない羽目にとも天皇は自らを追い込まれてございまする.

「多治比浜成卿が, どうやら話せるほど回復なされたよしにございます」

田村麻呂は急ぎ卿の元へ参上しました. 勝てるはずの戦が, なぜ, 負けたのか誰もが知りたい事のようです.

「私達は今でも勝ったと思っていますが, 結果は負け戦になっている. 京に戻り見てその理由の一端に触れた感じです」

「蝦夷の大地には, そのようなものは有りません. 川を渡った向こうには道もなき原野林でございます. 敵はそこを縦横無尽に動き回り, 枝から枝へと, 地に頼らず動き回ることが出来ました. 一方で我が軍はといえば, 道なき道の原野林を隊列を組んで進行でございます. 真上の姿が見えない彼らに右往左往するばかりです, 近衛兵が出撃すると, 彼らは脱兎の如く見えなくなるのです」

「ばかな! 道も作れぬ彼らの土木技術の無知に, 橋一つも作れぬ彼らの無知に, 今度は十万の軍で出兵します. 蝦夷の大地を十万の軍で踏み込めば, 彼らを威圧できましょう」

「いや, 経験から言えば, 無知だからこそ持久戦にかければ彼らは落ちます. こちらは, 橋をかけ, 道を作り, 原野を耕

地に変え富める生活の有り様を, 蝦夷の大地に住む群落の民人に見せれば, 彼らは, 日本国に従属してきます. 時間をかければいいだけです」

「天皇は許されないでしょう, 自分の代に六十六カ国の支配権を確立する為に, ましてや, 海外の情勢も激動の様子です. 悠長な時間はこの国にを失墜させる. ご存知のように, 大陸文字を, 独自の日本国文字としての読みも, 六十六カ国の人々へ日常語として, ようやく定着し始めた時期でもございます. 蝦夷地に大陸文字が定着するまえにも, 日本国の支配を成さなければ, 大陸の唐の崩壊は直ぐそこにきているらしいですから」

. . . . . はや, 月も落ち. 月影も闇に消えますなれば, 私の語りはまたといたしまして, 今宵の事はこれにて閉じるいたしとうございます.

昔々のことでございます. 倭の国が日本と称号を成して. 天皇権がゆるぎなきつつある時代の事の話でございます.

御事二つ

天皇に幸あれ, 桓武の御世に栄えあれ. 人々の喜びと賞賛の影に, また, 陰のひそひそ話も京の町を駆け巡ってのことは, いつの御時でも同じでございまする.

桓武天皇のその母方の百済系渡来血筋が, 天皇権の傍系であるが故の宿命は, 今後も世の動きに影を落としはじめると, 一方では巷に囁かれていましたのも事実でございます. いわゆる, 新しき長岡京を捨て, てひた走りに平安京造営に精進するのは早良親王とその母皇后の怨霊の恐れからだと.

確かにでございましょうか. 桓武天皇におかれましては, 次から次と愛する肉親を失っていかれましてございます. 血でぬぐった皇位継承の怨霊の御霊を静めるため, 桓武天皇は伊勢神宮へ再三にわたり参拝するようになりました. ここに, 以後において, 天皇家に伊勢神宮に参拝する仕来たりが出来ましてござります. この仕来たりが, 日本国の御事になりましてございますのは, 平成の御世においても, 国家首相が御事とし継承されていることは, みなみなさまにおかれてもご承知でございましょう.

さて, アテルイと言う発音ですが, 文字にすると, 阿弖流為 (あてるい) でござます.

阿弖流為

馬をかければその右にでる者有るや
人心を操る術はその右にでる者有るや
蝦夷の人心を治めその数弐千なりか
しかして その弐千の人身をもってして
日本の五万の軍を破り足るなり
しかして その治める大地には
原生林の山河なりき雪深き大地なりき

日本の五万の兵が敗走へ追い兵することなく
日本が無理やりにこの大地に攻めて来る
我々から戦など一度足りとも仕掛けないのに
なぜ共存できぬのだ

涙を北上川に流しながら死者に泣いたと言う

勝ち戦に酔う部族に
阿弓流為は激怒して諌めた
お前達は日本の物を手に触れ
死者から武具を得た
お前達はもう日本に勝てない
日本は富める国だ
もっともっと大軍がやがて攻めてくるだろう
お前達はもう勝てない
俺たちは戦をしたのではない
向こうが責めてきたから防いだまでだ
北上川を血で染めた流れは
死者の家族や親族や先祖の流れぞ
お前達はそれを汚した
恥を知れ恥をしれ日本と同じではないか

神よなぜ平穏な慎ましい生活の郷が
許されないのですか
醜い争いの大地になさるのですか
阿弓流為が北上川で流した涙が
いまも聞こえてくるのですよ
ヒューヒューという風の中にね

この, 阿弓流為と同じ涙だを流し同じような文言は, 今からどのくらい前に遡りましょうか, 多分, 百五十年前でございましょうか, アメリカ陸軍を初めて敗戦 (カスター大佐軍の壊滅) させた. 部族酋長シテンブル? が, 戦勝にわき酔う部族へ, やはり同じような文言を語り悲しんでございまする.

その後, シテンブルはアメリカ政府が保護したインデアン保護地域内で白人によって殺害されてございますが. 当時相当な民間懸賞金がシテンブルには賭けられていたともうします. (カスター大佐軍の壊滅) は, 陸軍令を無視し独自に自隊へ命を発してインデアンへ戦を仕掛けたことは, この事件を扱った陸軍の内部文書に記載されてございます. この, 命令違反とも言う戦を勝てると, 彼は信じたのでしょう. 勝てば, 彼はこの年に行われる大統領選に当選するでしょうし. が, 戦の相手がシテンブルとカスター大佐は知る良しも無かったようですし, インデアンの方も宿敵のロングへ

アー (カスター大佐) だとは, 戦勝後知ったようでございます.

. . . . . はや, 月も落ち. 月影も闇に消えますなれば, 私の語りはまたといたしまして, 今宵の事はこれにて閉じるいたしとうございます.

昔々のことでございます. 倭の国が日本と称号を成して. 天皇権がゆるぎなきつつある時代の事の話でございます.

藤原緒嗣

申しそびれました事でございますが, 桓武天皇の父系血筋の正統性とその重視による, 自らの天皇即位の御事が, 日本国のその後の父系血筋の系図優位性になりましたことも, それまでは, この列島におきまして, 久しく男女同権の思想であり申し上げておきまする. この時期に, 先にも申し上げたとおり, 天皇家による伊勢神宮参拝の御行事と父系優位の確立が日本国の御事と植え付けられてございます.

七九四年元旦, いよいよ, アテルイが予言したように. 征東大将に大伴弟麻呂・副将軍に坂上田村麻呂を要しました, 十万余の征東軍が都を出征してござりまする. 馬上の田村麻呂はアテルイに会える歓喜の心を抑えるのに身が震えたと聞き及んでございまする.

同六月に多賀城に全軍が集結終えるやいなや, 間髪おかずに, 田村麻呂は近衛兵を先陣隊として蝦夷の奥地へ向けて進撃作戦を始めたのでございます. アテルイとの遭遇を胸に秘めて同十月まで蝦夷の大地を駆け巡るのですが, アテルイ本隊に会うこともかなわないなかでいるなか. 大将の大伴弟麻呂は無念の引き上げを, 天皇に奏上せざる得ない結果に終わりましたのでございます.

三年の月日と十余万の軍隊と多大な出費をして, 蝦夷地で得た成果は, 斬首約四百六十人・捕虜百五十人・獲馬九十頭を持って征東軍が都に凱旋しましたのでございます, これが, 始めて大和軍隊が蝦夷地であげた戦勝でございます.

その夜のことでございます, 参議の藤原緒嗣卿の館へ出向いた田村麻呂卿は, 夜通し二人でお話になされたよしにございまする. ここで, 何が話されたか余人の知る由もあり申せませんが, 蝦夷地での感触の全てを, 卿に話されたとは間違いないようでございます.

七九七年に都中が驚く噂が宮中より発せられましてございます, 坂上田村麻呂が天皇と同じ権力を持つ, 関東以北の征夷大将軍に任命されるとのうわさが, 巷の噂は, ことに, 貴族の公達から疑心暗心の様が, そのまま都の街じゅうを流れたのでございます.

「いや, これは藤原緒嗣卿の案らしいぞ, もやは, 民からの軍費調達は限度を過ぎているよしで無理との事. 軍備の多くは現地調達で当てる, 関東以北の税でまかなえる軍隊数は四万が上限となされたごようす」

「ここ十数年を, 長岡京造営・それから平安京造営と, さらに, 蝦夷地への再三の出兵と. 休まることなく続く民への徴税が, よくよく民の苦しみと悲しみに, 藤原参議が憂いているとのことらしい」

初めて, 成果らしい成果を都にもたらした坂上田村麻呂は天皇の覚えもよろしく. その成果によって, 延暦十五年一月に陸奥出羽按察使兼陸奥守に任命され, 鎮守府将軍をも兼ねましてございます.

ここに, 蝦夷地支配が坂之上田村麻呂を中心とした長期戦への方向転換がなされたのでございます. 征東大将でなく, 関東以北の大地を天皇に代わって全権を任された征夷大将田村麻呂が誕生してございます. 彼の最初の決断は, 長老の菅原真道卿による矢のような, 直ぐにの蝦夷出兵要請をさけました事でございます.

彼は先の出兵で, 関東以北のいろいろな豪族間の情報を集めていましたのです. 加えて, 関東以北の全権を天皇に代わって任されることになっていましたので. いがみ合う豪族同士の婚姻関係を進めたり, 受け入れた豪族の郷には数年間の税の免除を約束し, 奈良の郷で開発した寒冷地や原林を開墾する農具を, 日本国統治下に入った豪族へ無料で貸し与えてございます.

いがみ合う郷の争いは消え, 税の免除で豪族は富み増やし, 郷の民の生活も安住し. 富を得た豪族は更なる原野の開墾に力を注ぎまして, 日増しに力を蓄え, その力に田村麻呂は川に橋をかける技術を教え, 道を作る重要性を教え. 今漢人の技術を遍く関東以北の大地へ植え付けることに田村麻呂卿は邁進したのでございます. まだ姿見ぬアテルイに今度こそ勝ちたい一心で. が, 藤原緒嗣卿も田村麻呂も, この時まで, 蝦夷の大地を日本国のものとするのに, 更に十数年もかかるなどとは思いもよらぬことでございました. 時に田村麻呂四一歳で参議藤原緒嗣卿は四十代でございます.

. . . . . はや, 月も落ち. 月影も闇に消えますなれば, 私の語りはまたといたしまして, 今宵の事はこれにて閉じるいたしとうございます.

昔々のことでございます. 倭の国が日本と称号を成して. 天皇権がゆるぎなきつつある時代の事の話でございます.

アテルイ

阿弓流為

北上川に立つと
ゴーゴーと風は空を走り
ヒューヒューと風は原野に響き渡り
遠い昔のはるか遠き列島時代に
阿弓流為が流した涙の音が
混じり聞こえてくるのです
人はどうして争うのか
人はどうして平和に暮らせないのか
富など求めず
家族の平穏な日々の生活郷を
神はどうしても許されないのか

さめざめと 流す涙の音色が
ゴーゴーと在れ吹く風に
ヒューヒューと吹き荒ぶ風に
かすかに聞こえてくるのです

大地の尽きるまで日本国のものとせよ
天皇の御世に幸在れ栄え在れ
坂東の安危この一戦にあり
ひたすら富を求める一団の息吹
建国に燃える集団の息吹が大きく
私の両耳を塞いでくるのです
今はもうこの列島はその真っ只中
列島の古代は否定され
日本国の古代が教育となり
勝つまでは欲しがりませんと戦を仕掛けたり
会社へ忠誠心を捧げ家族の絆も切る社会を作ったり
神代の国が建国日となり
不夜城の栄華をひたすら追い求める一億の民人が社会

さてでございます．その昔より蝦夷の大地に住む蝦夷人においては, 大和の中央政府などに関わり無く, それ以前より, 自由に行動した生活を楽しんでおりまたことはもちろんでございましょう.

日本統一を任ずる大和朝廷におかれましては，自分たちに従わない，この蝦夷人集団の存在がまことに不都合千万に思しめさることは当然な結果でございます，また，蝦夷人にしてみれば，これもまた，大和朝廷こそ自分達の平安な生活圏を脅かす無法なる侵略者である事は確かでございまする．

ここに，坂上田村麻呂とアテルイの激突が，必然的に避けられない運命でありました事はきわみのかぎり，と申し上げる所存でございます．

蝦夷地が自由な天地である限り，九州の豪族たちが大和におとなしく従う謂れもなく，征東軍の蝦夷地占領が敗軍のたびに，九州豪族を統治下に置くことの苦悩が天皇政権には影のように蔽ってございますので．

十余万の大軍をもってしても大和は蝦夷地を平定できなかった．九州豪族達の民意の動きは活発になり，大和へ服従する必要もなかろう，自分たちも自由な生活圏で生活様式を持っても良いではないか．

アテルイを討てなかった大和政権圏へ列島各地の民意の開放動きは，長老菅原真道の暗示した如く年とともにうねってきたことも事実でございもうしあげます．このまま形だけの蝦夷地征服の政務は，必然的に他の豪族の独立乱を誘発する危険を察知しだし，三ヶ月間の十余万の大軍をもって初めて胆沢を形ばかり征服は，一年も経つ頃から，主に九州地方の豪族に日本なるものへ乱の不穏気配と流れ始めてございます．

桓武天皇は征夷の発令を坂上田村麻呂へ伝え，関東以北の全権を天皇に代わって執行する征夷大将坂上田村麻呂として，後には引けない断を下してございます．蝦夷地支配というよりも，その実質はアテルイ討伐軍勢であります．

八〇一年四万余の軍隊を持って，蝦夷奥地へアテルイとの遭遇を目指して進軍を開始しましたのでございます．田村麻呂はもう戻る事は不可能な位置に追い込まれてございます．アテルイを倒さない限り都へ軍を引き返す事は出来ない状態であり，アテルイとの戦に負ければ全滅を覚悟のなかを，胆沢から未知なる原野へ兵を進めてございました．六月の空はどんよりとして，原始林の中を進軍するには余りにも

惨めな行軍の風情でございます.

北上川上流である志波地方を征圧した大和軍勢は, 志波城を築き北上川流域の肥大な土地を, ようやく, 日本管轄下に成功すると, 多賀城より北辺の大地の基幹にすべき, 胆沢城の補強に田村麻呂は勢力を注ぎましたのでございます.

志波城柵を築し胆沢城を頑強にした事によって, 大和政府は北上川流域の肥大な土地を完全に手に入れたのでございますが, ここでも, 田村麻呂の政務は抜きんでいたのございます.

蝦夷人の奴隷化を完全に禁止をし, 皇民と対等なる民意識を大和の国に根付かすのでした. 北上流域の肥大なる土地を蝦夷人そのものに与え, 大和国から来た移民を優遇はしませんでした. 更に, 蝦夷人の女性を狩ったものは死刑に処してございます. それまで, 多くの蝦夷人は奴隷として, 大和の国中へと送り込まれ, 特に, 蝦夷人の女性は子供は都近辺へと献上されていましたご時世でございたましので.

時同じく, 平安の都の政策も応ずるように, 帰属した蝦夷人集団を, 山陰地方などの未開地へ皇民 (天皇の民) として入植させるなど, 蝦夷人と大和国人の平等を植え付けるのに躍起となって進めてございます.

翌八〇二年四月十五日, アテルイとモレは五百の蝦夷人を従えて, 多賀城に投降しましたのでございます. 北上川支流である衣川を呑みこむ原野で, 田村麻呂精鋭隊がアテルイと遭遇し, 引き上げようとするアテルイへ田村麻呂は叫んだそうでございます. — アテルイ! もう無益な罪無き兵の殺しあいはよそう! — この叫びを聞き入れたのでございます. 自分の身はどうなってものよいが, 蝦夷人の安住と保障の田村麻呂を信じたのでございまする.

「アテルイ軍が田村麻呂に降った」この知らせは, 都はもちろんの事で大和政権下において, 名実とも「日本国」なる勝利と, 「この大地に住む者は全て天皇の民 (皇民) となす」と言う, 聖徳太子の悲願であった根流が, 桓武の御世でようやく達成したのでございまする.

京に着いたアテルイとモレは罪人として引き回され, 田村麻呂の坂東の統治をアテルイへの嘆願は, 貴族たちによって無視され. なにしろ, 歴代の征夷大将の御公達以下の卿たち

は, アテルイ憎し怨念や, 蝦夷地での己が数々の行為を (蝦夷人を奴隷狩りして), 奈良の都等々へ献上したこと等々を, アテルイに喋られてはお困りのはずでございますし, 貴族の嘆願により天皇の命によって河内国で処刑されましてございまする.

処刑された跡地には, 数十年間に渡って, 都の弱女たちからの献花が耐えることはなかったと言うことでございます. 彼女たちこそ蝦夷地で狩られ, 大和人によって都へ売られた当時の幼子の若き女人たちでございまする.

. . . . . はや, 月も落ち. 月影も闇に消えますなれば, 私の語りはまたといたしまして, 今宵の事はこれにて閉じるいたしとうございます.

昔々のことでございます. 倭の国が日本と称号を成して. 天皇権がゆるぎなきつつある時代の事の話でございます.

後述記

アテルイが日本の軍門に下って, すぐさま奥蝦夷地への進撃が, 時の政権なら望むのでしょうが, ここに桓武天皇にあられましては. 今日でも有名であるところの, 「天下の徳政は?」で, 長老菅原真道と若き藤原緒嗣とを呼んで天皇の御前で論戦させたのでございます.

ひとり, 緒嗣は初めて天皇の政務を非難したのでございます. 都造営と蝦夷遠征の出費がどれほど多くの民を苦しめているか, 若き緒嗣は堂々と死を覚悟して天皇の御前で論じきったのでございます.

桓武天皇の断は, 以後の蝦夷出兵を後世代においてもする事を禁じ, 都の造営を止めとの詔でございます. その三ヵ月後に桓武天皇が没し. その御子が平城天皇となって, 政治の改革を斬新し, 下級官吏の積極的な登用を進め, 彼らをして日本国内全地へ派遣をし状況を見定めさせてございます.

また, 報告がる弊害な高位の者を排除させ, 一丸となって, 以後, ゆるぎなき日本国建設へと進みましてございまする. 蝦夷人もまた全国へ各地へ入植され, 同じく, 九州・四国・中国・近畿・大和等々の豪族も一族集めて, 蝦夷地へと入植も進められてございます.

が, 平城天皇に置かれましても, 父の桓武天皇と同じ宿命を持ち, 昔の奈良京における勢力の怨霊か, 平城天皇も御母とその子の皇太子を, 自ら殺さなければなりませんでした. この傷心で平城天皇は退位をなさりございました.

終わり.

Appendix A 筆者記

はじめ, 米国のパウエル国務長官の顔を TV で見た時, アテルイの顔彫面 (茨城県鹿島町鹿島神 宮蔵) が瞬時に浮かびました. その後にテロ・アルカイダの統帥者であるビン・ラデンの顔写真をみて, 直感的に坂上田村麻呂が脳裏に走りました.

田村麻呂はもう伝説上の人物と関東・東北ではなりましたが. 鎌倉幕府も江戸幕府も武士政権の源流が坂上田村麻呂が関東以北で成した統治の結果であると, 源流は彼に行き着くはずでしょう. 彼は, 今漢人 (いまあやと) の帰化人であり, もしかしたら当時の日本国家へ最新の軍事知識をもたらした人物かもしれません. 色白な大男と私には思えて仕方なく, もしかしたらビン・ラデンのような容姿をしていたかもと思えてなりませんです.

アテルイは, 彼をよく知りえた人物は田村麻呂しかいないかもしれません, アテルイの分身部下であり盟友であるモレもアテルイと同時に当時の河内国杜山で八月十三日斬刑に処せられましたので.
坂上田村麻呂はそれを聞き及んで, アテルイの住んでいた郷 (洞窟) に, 京都清水寺に模した堂を建立し毘沙門天を祭った. . . . . .唯一の救いに思えます. 毘沙門天を祭った御堂を, しかも, 清水寺をもして達谷窟に建立したのも, アテルイとモレに生きていて欲しかった, さらに, 関東以北の大地を自分に代わって統治してもらいたかった表れと, どうしても, 思えてなりませんです.

アジアの東に位置する, この列島諸国は, わけもわからぬ神代の国から「日本」ではありませんです. 約 18,000 年前アジアに起こった人類大移動で北上した人々を基礎とし, それ以後この列島にはさまざまな地域文化をもった人々が住み始めた. 縄文の時代は, 列島内でそれぞれの様々な地域で各文化言葉が行き交いした社会構成を見る事でしょう.
やがて, 大陸から稲耕作が入る, 本土に住んでいた社会はそれを受け入れた. が, 沖縄と北海道に住んでいた社会は稲耕作を拒否しました. 本土社会は稲耕作をさらに自己社会環境へ改善し始め大陸からの最先端の技術者を向かいいれる事にも精を出しました. この文化が弥生文化となり, 稲農耕による生活の安住が, 王権社会組織を生み出し, 王権連合組織へと向かい, 天皇権による日本国家設立とこの列島は様変わりをしていきます.

ただ, この時代の風俗でございますが, 多分動物と同じような人類環境ではなかったかと想います. 私の独断と偏見ですが, 動物の持っている縄張り意識依存環境であり, 同じ (人間) 種族でも自己の縄張りに入ったものは殺し合いを成したと想います. だから, 勝った者は敗者の首を切り取りその髪の毛を掴んだり, 帯に巻き付けて他者へ見せ占めたと想われます.

戦後の日本社会; 皇民 ⇒公民 (+主権) になりました.

2002/12/31 吉田征夫